

VII Panos Mantziaras 博士（クレルモンソーフェラン大学・フランス）の 短期招請について

理工学部助教授 田路 貴浩

P. マンツィアラス博士は、2002 年 7 月 1 日から 31 日までの一ヶ月間、明治大学の招待教授として滞在され、精力的な教育、研究活動をおこなわれた。氏は都市計画思想を専攻される新進気鋭の研究者で、1967 年ギリシアに生まれ、ペンシルヴァニア大学大学院修士課程、パリ建築学校大学院博士課程 D.E.A を修了し、2000 年にパリ第 8 大学から学位を取得された。学位論文のテーマは、第二次世界大戦後のケルンでマスター・アーキテクトとして都市復興におおきな業績を残したルドルフ・シュヴァルツの都市計画思想である。シュヴァルツはハイデガーを中心とする戦後の実存主義に影響を受けており、「有機的」な都市構造の構築によって「大地」に根ざした「都市景観（city-landscape）」の創出をめざした。シュヴァルツがいくつも描いた都市のダイアグラムは、膨張し場所性を喪失していく近代都市における「都市のアイデア」の模索であったと言えるだろう。しかしながら、シュヴァルツのそうした思想は戦後民主化の潮流のなかで危うい保守主義とみなされ、多数の著作や計画にもかかわらず、わが国ではまったくと言っていいほど知られておらず、ヨーロッパでもその存在はほとんど忘却されていた。マンツィアラス博士の研究はそうしたシュヴァルツの都市思想を二〇世紀の西洋の都市計画の流れのなかで捉え明らかにしようとするもので、膨大な資料にもとづくたいへんな意欲作である。それはまた、近代化の過程で都市のイメージを喪失してしまったわれわれ日本人にとってもきわめて示唆的で興味深い。

氏の講演は「都市景観と都市のアイデア」と題する共通テーマのもと、学位論文の概要を二回に分けてお話しいただいた。また今回の貴重な機会を活かし国内研究者と議論していただけるよう、講演会にはゲストを招待し、マンツィアラス博士とゲストに講演をいただいたのち討議をおこなった。

第 1 回「都市景観と都市のアイデアー都市のアイデアと都市の様式」

ゲスト：香山壽夫先生（建築家、元明治大学理工学部教授、東京大学名誉教授）

第 2 回「都市景観と都市のアイデアー現代の都市景観」

ゲスト：齋藤潮先生（景観工学、東京工業大学教授）

第一回の講演会では、マンツィアラス博士にはシュヴァルツの都市計画思想について、香山壽夫先生には江戸の都市景観についてお話しいただいた。

マンツィアラス博士はまず、シュヴァルツの都市計画が 1930 年代ロシアの都市計画やフランク・ロイド・ライトの都市計画と同じように、都市の拡散を目指していたことを指摘された。そののち、シュヴァルツの活動や都市計画思想の展開を時代順にお話しいただいた。第二次大戦前、シュヴァル

ツは建築家として活動をはじめており、アーヘンを中心にいくつかの建築作品が残されている。しかしまもなく転機が訪れ、1941 年からは第三帝国支配下のロレーヌで都市計画に携わるようになった。

この時期、ベルリンの都市計画家マルティン・ヴァーグナーを知り、建築家のミース・ファン・デル・ローエとともに活動し、彼らから多大の影響を受けた。戦後はただちにチーフ・プランラーとしてケルンの都市復興に参画し、また『地球文化について』と題する著書を著すなどして都市思想を深めていった。その思想はハンス・ペルツィヒなどの表現主義やカトリシズムなどを背景としており、有機的なツリー構造を理想とする社会・都市モデルが構想された。

香山先生は、幕末から明治初期にかけて来日した外国人たちが、そろって江戸の街並みの美しさに感嘆していたことから話しをはじめ、環境の連続性を生みだすためのアーバン・デザイン・コードの必要性を指摘された。

第二回の講演会では、マンツィアラス博士には西洋における近代都市計画思想の流れについて、齋藤潮先生には都市景観とアイデンティティの問題についてお話しいただいた。

マンツィアラス博士は、西洋の都市計画の流れを中心式から多中心式、さらには無中心式への流れとして説明された。いうまでもなく中世までのヨーロッパ都市は明確な中心を有していたが、近世にはいと「無限」の思想が登場し、「多中心思想」が都市計画にも影響を及ぼすようになった。19 世紀になると、近代化の進展によって都市はいっきに拡大をはじめ、20 世紀になるとブルーノ・タウト、マルティン・ヴァーグナー、エルンスト・マイなどがつぎつぎに都市の解体を唱えはじめ、ミリュエティンの線状都市にいたっては中心をもたない都市が構想されるようになった。

齋藤先生は、竹富島、外泊、今井町などの歴史的集落は風土や社会の与条件への適応から個性的な風景を育んできたのに対して、技術によって環境が均質化してしまった現代都市はいかにして個性的な都市景観を獲得できるのか、さまざまな試みが紹介された。

現在、東京はあいつぐ大規模再開発によって都市景観がいちじるしく変化しているが、そうした開発の多くは都市をたんに経済活動の場として捉える極端に偏向した見方によって主導されてはいないだろうか。新たな開発へとつねにせき立てられる資本の流動が都市のあり方を決定する最大の要因となり、「都市のアイデア」を集団的に練り上げる悠長な時間はすっかり奪われてしまっているように思われる。西洋の諸都市が成熟した環境を育ててきた背後には分厚い都市思想の蓄積があること、このことをマンツィアラス博士の講演から知ることができたのは大きな成果であった。都市のあり方を社会のあり方にまで掘り下げた議論の蓄積がなければ、都市は経済によって翻弄されるがままであり、文化的な環境としての成熟は望めないことを痛感した次第である。

最後に、ご協力いただいた香山壽夫先生、齋藤潮先生、通訳をお引き受けいただいた福崎裕子先生、鈴木宏子さんには心から感謝を申しあげたい。またマンツィアラス先生の受け入れにあたってお世話になった国際交流センターの常刀さんにも感謝を申しあげたい。